

## カレリア再訪

山口涼子

私がロシア北方の地カレリアと出会ったのは運命としか言いようがない。なんのコンネクションもなく、地理的にもあまりに遠い土地であったが、私がフィールドワークを始めると、思いもかけず早く私の前にやって来た。わずか二度目のフィールドワークのあとすぐに、北の街ケミに、ペトロザヴォーツク大学のソフィア先生が招待してくださいました。

そこで経験したのは、今まで見たことのない世界だった。遠い地平線、真夜中も照らす太陽。月と太陽が同時に空に浮かんでいた。自然は私を圧倒した。なすすべもない私だった。こんな私だからもう二度とカレリアの地を踏むことはないかもしれない……。

帰国後、喪失感でいっぱいだった私の前にウネルマの著書「悲しみのポエジー」は、現れた。翻訳の出版が決まると、私はネットでペトロザヴォーツクやモスクワの友人、知人と密に連絡を取りながら、仕事を進めた。翻訳という作業を通してみんなが家族になった気がした。

この春、ふたたびペトロザヴォーツクを訪れた私は、恐ろしかった自然が笑顔ほころぶように私を抱いてくれるように感じた。ペトロザヴォーツクの街を歩いていると、どこで私を知ったのか、見知らぬ人から名前を呼ばれてチョコレートをもらった。日本語を学ぶ学生たちとの交流、翻訳のプレゼンテーション、テレビのインタビュー、どれかで私を見てくれたのかもしれない。たった三日の滞在が、まるで、十年も住んだ土地のように懐かしい気持ちでいっぱいになった。カレリアに住むたくさんの民族の自然への信仰と祖先への思



オネガ湖で子どもたちと (写真/エレナ・フルツェワ)

い。それはまるで日本にいるときのように私の心を開放的にした。友人のレーナさんがくださったカレリアの民族衣装を着ると、とても暖かく心地良かった。私はすぐにこの衣装でインタビューに答える気になった。共同住宅の最上階の窓からはオネガ湖が見え、夜には、低い音が響いた。氷の解ける優しい音だった。こんなにそばに自然があるけれど、私は少しも怖くなかった。やっと、カレリアが神秘の扉を開けてくれたときだった。波まで凍った青い青いオネガ湖の上で私は二本の足でしっかり立ち、心の震える思いをした。今でも私の心はカレリアにある。

©Ryoko Yamaguchi, 2015



ペトロザヴォーツク大学で取材を受けるアレクセイ・コンカ先生と筆者 (写真/マリヤナ・ヤナ)